第五部

overlooking

俯瞰

overlooking

「みたまえ」

overlooking

ルツトは自分に、
微かに微笑み、
美しい黒髪が風にふかれて
暴れさせている
ファム・ファタル
をいつまでも、見ていた。

overlooking

「はじめに力ありき」

overlooking

「お前さんに宿っているのと同じ、星から流れ落ちる力を用いて、空を飛んでいるのさ」

overlooking

「お前たち賢力導者は、
私にとって隻翼の梟だ。
たとえ、
私が羽をもいでも、
力を用いて空に飛び立つだろう」

「それでは、王国一か統合一か、決めよう」

overlooking

overlooking

「君はとても綺麗だ。そんな君を作り上げたヴェスヴェルさんに、
僕はたくさん嫉妬している。それは…」

overlooking

「お前がもし、女だったら、
間違いなく、俺の妻にしようとしただろう。
そのために俺はヴェスヴェルと戦ったはずだ。
たとえ、命を落とすことになるとしても」

overlooking

「お前のアウレフスを抱かせろ」

「それなら、
あの男を始末した後、
たっぷりお前を弄んでやろう。
それも俺のアウレフスができるまでだ。
知っているだろう、
前のアウレフスは必ず
今の俯瞰の男に抱かれる。
お前の男もそうした」

overlooking

マリツファは右手をおさえて、その手が熱を帯びていると感じ、1吐き気を感じ、とても気分が良くないと思ったとき、気を失っていた。

overlooking

overlooking

　男は医者から、
マッチ箱を受け取ると、
箱を開けた。
　そこには虹色の光沢の
金のような固形物があり、
錆びて腐った不純物が付着している。

overlooking

　ヴェンウンは、
途中から、
ギイウーンの話に顔をそむけて聞いていた。
「それは、
可哀相だな……」
「そうか、
何と呼ぶか困るか」と、
おざなりなことを返した。

　――そんなはずはない。

　ヴェンウンはそう思いつつ、
　それをギイウーンに何とか悟られないように、
　話題を変えようとした。

overlooking

「みたまえ、
弱虫ルツト君、
私とはこれだよ」

The man of the overlooking

第五部　俯瞰